

日本文學の進路

近藤忠義著

東京

伊藤書店

日本文學の進路

近藤忠義著

東京
伊藤書店
1948・初版

日本文學の進路

一九四八年九月一五日 印刷
一九四八年九月二〇日 發行

定價 二〇〇圓

著者 近藤忠義

發行者 伊藤長夫

印刷者 山元正宣

東京都千代田區神田小川町二ノ四

發行所 株式會社 伊藤書店

出協會員番號 A一〇九〇〇三

振替東京七八一七
電話神田(25)二七五

目次

I 現代の國文學

國文學のために……………	一
國文學の再建……………	三
國文學と現代文學……………	三
古典と現代文學……………	四
國文學・文學・文化……………	五
『國文學』と文學……………	六
II 文學と政治	
「人間」主義への偏向……………	六

Ⅱ

現代短歌の問題

文學者と戦争責任……………	七
新しい出發點……………	六
鑑賞の出發點……………	九
ジイド 汜濫……………	九
藝術主義批判……………	一〇
現代短歌の反省……………	一三
萬葉集と現代……………	一七
現代短歌の古典性……………	二三
短歌の永續性の問題……………	二七
短歌と小説……………	三三

IV 近代作家の前近代性

尾崎紅葉論	一九四
一葉の小説	一九三

V 日本文學の傳統

二つの文學傳統	三三
古代文學ノート	三四
中世文學について	三五九
近世小説の成立	三六四
跋にかえて	三六
——回想十五年——	
附記	三五五

I 現代の國文學

國文學のために

一

國文學といふ言葉は、「日本の文藝」及び「日本文藝の研究」といふ二つの意味を持つて居る。そして元來、文學といふ語に、「藝術作品としての文學」の意味とそのやうな藝術文學の「研究」の意味とがあつて往々混亂を生じる爲に、最近では研究の意味の文學を特に文藝學或は文藝科學と呼んで混同を防ぐ事が行はれて來てゐる。私はこれから「國文學の再建」といふ題でお話するのだが、この國文學といふ意味は、日本文學研究を指すものと考へられたい。ところで、今日世間一般の常識は、國文學といふものを日本文學研究一般ではなくして、或る特別な性質を持つた日本文學研究だと言ふ風に、言はず語らずの内に、感じ取り或は理解して居る。例へば現代日本の小説や戯曲の研究は勿論日本文學研究に相違ないのだが、人はこれを國文學の名で呼ぶ事に多少の躊躇を感じる。そして事實多くの所謂國文學者は現代文學をその研究對象の外に（又往々彼

の關心の外にさへも置いて居る。先づ茲に、國文學といふものの、學問としての性格上、一つの重要な制限のある事が注意せられる。更に又日本の古典文學の研究の場合にも、國文學者の研究方法は、彼等以外の學者・文壇人の採る現代文學や海外文學に對する研究方法とは、何かしら根本的に違つたものであるかのやうな印象を一般に與へてゐる事も事實である。茲にも亦、所謂國文學の學問上の性格に何か特殊なものがあるらしい事が想像せられる。

要するに國文學といふ言葉が、日本文學研究といふ言葉とは全く同一ではない語感を、人々に呼び起させるといふ事實は、單に言葉の問題にとどまるものではなく、實は所謂國文學といふ學問それ自身の特別な在り方・性格（それは後に述べるはずの「學問としての舊時代性」||封建性に他ならぬのだが）を、その儘に反映してゐる事實なのである。

このやうな特殊な語感を伴はしめざるを得ないやうな舊來の國文學といふ言葉を假りに日本文藝學或は日本文藝科學といふ言葉に置替へても、何ら不自然さをも矛盾をも感じないやうな、さういふ學問にまで吾々は從來の國文學を發展させたいと考へるのである。但し、日本文藝學といふ言葉は、數年來東北帝國大學の人々が中心となつて主唱せられた關係上、その人々の方法を指す固有名詞となつて來て居る爲、私どもはそれとの混同を避けて、新たに樹立すべき民主々義的

合理主義的・科學的な日本文藝研究の體系を、日本文藝科學と呼びたい。

さて、日本が十世紀以上にも及ぶ長い期間に涉つて身に附けて來た封建的な性格を拂ひ捨てて、遅ればせ乍ら經濟的に政治的に社會的に、従つて又、精神諸文化の各分野に涉つても、新たに民主々義的再建の大事業に邁進し、その事を通じて世界人類文化に貢獻しなければならぬといふ、當然のそして又、困難ではあるが輝やかしい時代に、今や吾々はめぐり合つたのである。私どもの携はつてゐる日本文藝の研究の面に於ても亦、前述の如く在來の所謂國文學を、正しい意味での日本文藝科學の名に値する近代的な學問に再建しなければならぬ。即ち、恣意・獨善に満ちた神がかり的な似而非學問、もしくは神がかり的なものを利用せられそれに奉仕せしめられる非科學的な偽學問としての性格を徹底的に打破し掃蕩して、何びとをも納得せしめ得る客觀性を持つ眞の學問を従つて特定の「政治」に隸屬せしめられるが如き間隙の無い學問を、そしてもし政治に何らかの繋りがあるとすればそれは唯眞理を熱愛しそれを探求する事を使命とする學問なるが故にのみ、正しき政治とおのづから協同し得るが如き學問を、樹立しなければならぬ。

要するに日本文學研究が、藝術科學、文藝科學として自主性を確立し、その事によつて、爾他の諸文化と正しく結びつき得る如きものたらしめねばならぬ。國文學の民主々義化とはかかるも

のを言ふのでなくてはならない。さうして此の仕事を遂行する爲には、今日迄の國文學がどのやうな學問であり、どのやうな弱點を持ち續けて來たかといふ點の確な把握が何よりも必要であり、特に傳統國文學の弱點は其の性質上、ここ數年間の大戦の期間に最も鋭く最も露骨に現はれざるを得なかつたのであるから、謂はば國文學の戦争責任が、この際、最も厳しく批判せられ摘發せられねばならぬのである。

或る私立大學の總長が、經營上の赤字を無くしたい爲に其の大學の文學部を廢止しようとした際に、反對者に向つて次の如く論じた話は有名である。即ち彼によれば、人生に於ける文學の意義とは、例へて言へば、彼の日常生活に於ける浪花節の如きものであつて、夕食後ラジオの放送する一曲の浪花節に彼の一日の勞苦を忘れ得る如く、かかる意味で文學とは甚だ佳きものである。しかし吾人男子たる者がその生涯を賭して一介の浪花節語りとなる爲に修業するの要はあるまい。文學の事亦かくの如し、と。この文學論、文學浪花節論は蓋し頗る滑稽至極ではあるが、しかし又考へて見るに、この笑話は、日本文學がその中で成長しなければならなかつた社會的環境が如何に文學にとつて不適當なものであつたか、又現にさうであるかを、實に端的に物語るものである。日本文學、少くとも日本近代文學を育てて來た環境が、この様に文學に對して無知無

理解である事の主要な原因は、明治以後の文教政策文化教育が、専ら法科萬能の官僚政府の手に委ねられて來、その大切な青年期を六法全書の暗記で浪費して了つた官僚が、この文學藝術に關しては殆ど痴呆症的に無知無感覺な俗物どもであつた事に由來する。彼等の理解にとつては、文學研究とは散文學の鑑賞であるに過ぎず、それ以外に眞の文學の營みあるを知らない。ロシアの農奴解放は言ふに及ばず、歐洲に於ける諸近代革命に對して文學が夫々いかに強力な挺子の役目發條の役割を果し得て、人間の解放・人類の幸福の爲に奉仕したか、従つて文學が男子生涯の事業として如何に大きな意義を有し得るものであるか、等といふ事は、彼等にはそれを理解するだけの素養も能力も全く與へられてゐないのである。近代日本文學の父、二葉亭四迷が、「文學は男子畢生の仕事と爲す能はず」と言つたとか傳へられるのは、決して彼が文學の意義を否定的に或は過少に見たからではなく、反對に文學をあまりにも眞劍に考へ之を尊敬し之を熱愛したからこそ、彼はそれを捨てようとせざるを得ぬに至つたのであつて、この事は「浮雲」や「其面影」を一讀しただけで充分明瞭に讀み取られるであらう。

しかし日本の文學を取り圍む環境の惡さについては一應これを本日の話題の外に置き、文學それ自身の問題について考へよう。日本文學研究即ち過去の國文學がどういふものであつたか、國

文學を弱點多き、歪められた學問たらしめた責任は何處に在るか、と云ふ點に就いて暫く考へてみたい。そして、その責任は、文學外の環境に在るよりも寧ろ舊來の國文學そのものの内部に在つたのである。

元來、文化と云ふものは、決して或る一部の人々だけの專有物であつてはならぬもので、廣く人民全體の共有財として總ての人々によつて均等に享受活用せられねばならぬ筈のものである。

文學が一部の人々、特に政治權力を持つ人々のみに獨占せられた時、その文化は、文化本來の機能たる、人間の幸福を押し高めようとする建設的な機能を失つて、逆に人間の幸福を破壊するものになつて了ふと云ふ事は、あらゆる文化の歴史が吾々に教へてゐる通りである。今日、日本文學、特に古典文學は、その本當の姿が、全く人民の眼から蔽ひ隠されてをり、そのうちの或るものは、政治的な目的の爲に不當に歪められた贗造物として、人民に押し賣りせられて來たのである。この事は今度の戰爭中甚だ露骨になつて來てゐたのは周知の如くである。

ところで、日本文學と日本人との間の正しい橋渡しの役目を果さなければならぬ使命を擔つてゐるはずの吾々國文學者が、此のやうな實狀を見ながら、何ら正當な處置を取り得なかつた事は眞理の探求をその使命とする學者として、少くともその怠慢の責任を痛感し、人々の前に謹んで

その罪を謝しなければならぬと信するのである。

特に戦争中、或る場合には無意識の中に、又或る場合には自ら進んで、このやうな罪を犯さざるを得ぬやうな破目に陥つた國文學といふものは、それでは一體どういふ學問であるか。私一個の確信するところでは、今日の國文學の歪み・誤謬・弱點は、歸する處國文學が明治、大正時代以後非常に偏つた文獻學としてのみ成長して來た結果、人生をより一層高める爲に人生を批判する、といふ學問本來の使命を果す能力を全く失ひ、單なる一個の技術となつて了つてゐた、といふ點にその根元を潜めてゐる。

明治維新後の國文學が、文獻學として出發した事は自然でもあり、それはそれでよいのであるが、しかし遺憾な事には、それ以後の國文學が、文獻學の眞の精神と方法とを見失つて單なる訓詁註釋や瑣末な考證などに偏向した儘、動脈硬化に陥つてしまひ、しかもこれを學問だと誤信し僭稱した、さういふ學問方法が、今日までの國文學の主流をなして來てゐたのである。

文獻學とは元來かかるものではない。初期の國學者荷田春滿あきみつるは「吾々が古語を研究するのは古義を明らかにする爲であり、また古義を明らかにするのは、畢竟古道を明らかにせんが爲だ」と言つたが、初期の國學の持つてゐた文獻學は、このやうに、たつた一つの單語の研究すらも、そ

の事自體が目的ではなく、古道を明らかにすると云ふ大目的に、しつかりと結びついた仕事であつた。しかも此の際注意すべき點は、春滿の言ふ「古道を明らかにする」と云ふ事の歴史的意義であつて、それは長い間の中世的な封建的な束縛から人間を解放しようといふ近世市民の建設的な欲求、歴史を正しく前向きに推し進めようとする要求が、彼等新しい近世市民たちの理想の雛型をおのづから古代生活に發見せしめた結果であつて、斷じて單なる復古主義ではない。この戰爭中しきりに古代日本が回顧せられ又宣傳せられたが、あつた不自然な欺瞞的なものと、この初期國學の復古精神とは、その歴史的資格を、即ちその本質を全く異にするものである。

初期國學が吾々に示したやうな、人間の幸福即ちまづ人間の解放をめざす要求、しかも歴史の進展の方向に添つた自然な要求によつて目ざされた大目的の爲に、文學研究全體のどんな瑣細な一局部をも其の最後の大目的と統一して把へる事、これこそが正しい本當の學問の在り方である。不幸にして現代國文學の主流は、健全な學問としてのかかる實體を失つて居る。訓詁註釋は訓詁註釋のための訓詁註釋であり、考證は何のための考證かを忘れた考證であり、資料蒐集は無目標の集めて置けば何か役に立つ事もあらうと云ふ行き當りばつたりの蒐集であり、遂には一種のマニヤ症狀さへも呈するに至つて居る。

このやうな偏つた文獻學が、人間を高め人間生活を向上せしめる爲の確乎たる大目的を見出す事を得ないのは正に當然である。

従つてかかる文獻學的方法を固執する學者が、その眼を廣く人間社會に行き渡らせる力、社會的な規模ある思想、批判の能力といふものを持ち合せて居ないのも亦當然である。

だから言ひ換へれば、かういふ文獻學的學者は、その思想や批判能力が甚だしく貧困であつても、また人格が低劣であらうとも、所謂専門家・所謂國文學者として一應通用するのだ、とも言へるのである。

かかる偏つた學問方法に頼つてゐる者が、文學の眞の在り方について無知であり、文學の藝術性に對して不感症であり、國文學が「日本文學の文學としての研究」である事を理解しえず、國文學をして、文學研究ならぬ單なる専門技術に轉落せしめて了つた事は當然であつた。彼等が言葉の嚴密な意味での「學者」ではなくして單なる「技手」・「職人」であり、精々のところ熟練工たるに過ぎぬ存在となつて了ふ事はまた當然であつた。

生涯、部分品のネヂばかり作つてゐる熟練工は、そのネヂのはめ込まれる筈の機械全體の構造や機能や使用目的に就いては何事も知らない。しかし職工の場合はそれでよい。だが學者は自己

の思想・批判力を以て、自己の構想を以て、學問と云ふ機械全體の設計圖を豫め創り得てゐなくてはならぬ。しかる後に各自の専門とする部分品の制作に従ふべきものである。

學者が正しい設計圖をみづから作り得るか否かは、彼がその中で生活してゐる社會に對して批判を爲し得るか否かによつて定まる。思想家・批判者としての資格を持たぬ學者は、ネヂ作りの職人であるに過ぎぬ。そしてさういふ部分品制作的な職人的な研究こそ人民全體の目から日本文學の本當の姿を蔽ひ隠す結果を生むものである。

學者をして思想家・批判者としての力を發揮せしめ得ない國文學が、滿洲事變前後から最近に至る迄の未曾有の動亂の時代に際して、全く自己本來の道を見失ひ、極度の混迷錯亂に陥つて、大小さまざまな誤りを犯すに至つた事は決して偶然ではなかつた。宛も太陽が蔽はれてはじめて星の姿が隈なく顯はれるやうに、偏つた文獻學の中にひそんでゐた弱點が混迷と欺瞞との時代に際會して急激に露骨に表面化するに至つたのである。

時の惡權力に阿附追隨して、或る者は滑稽なチンドン屋となり、或る者は無知にして陋劣な學界のギャングとなり、又或る者は破廉恥極まる密偵・スパイの徒となつて同學の士を賣つた。彼等は或ひは「あの際、國民として戰爭に協力するのは當然ではないか」と言ふかも知れぬ。しか